

# 現代における銭湯の利用への一考察

——サードプレイスを視座に——

A Study on the Use of Public Baths in the Modern Age:  
From the Perspective of a Third Place

真保 元

キーワード：銭湯, サードプレイス, 現代, 一日, 場所

The number of public bathhouses in modern Japan has been declining owing primarily to the widespread use of indoor baths. What place do public bathhouses occupy in the lives of modern Japanese people now that indoor baths have become widespread? What is the purpose of visiting a public bathhouse? This study approaches this question from the perspective of a “third place.”

Survey results revealed that public bathhouses are used as a third place. Additionally, we captured the manner by which public bathhouses are used as a third place during the course of a day’s travel.

This study overturned the existing typology of third-place studies and revealed that even a single public bathhouse is used in a variety of ways as a third place, and that although previous ethnographic findings have suggested that such a bathhouse has lost its function as a place of community and relaxation, it has been transformed and it is now clear that communities do exist.

It was also clear that third places are used as places for workers to

refresh their awareness during the day and for retired elderly people to connect with society in their leisure time.

## 目次

はじめに

### I 先行研究の整理と問題の所在

- 1 先行研究の整理
- 2 問題の所在

### II 銭湯の概要

- 1 銭湯の制度的概要
- 2 戦後における内風呂の普及と銭湯の減少

### III 銭湯に通う人びと

- 1 調査概要
- 2 サードプレイスとしての銭湯
- 3 一日の流れの中の銭湯

### IV サードプレイスとしての銭湯から見えてくるもの

- 1 生活者から見たサードプレイス
- 2 サードプレイスとしての銭湯はどのような場所か

おわりに

注

参考文献

## はじめに

銭湯の数は現代日本において減少傾向にある。内風呂の普及がその大きな要因である。家庭内で入浴することが可能になり、銭湯の日常における意味は著しく縮小したかのようなのである。一方で、内風呂が家にありながらも銭湯を利用する者は現在も一定数存在する。では、内風呂が普及した現在の生活

において、銭湯はどのような場として意味をもっているのだろうか。つまり、銭湯の利用者は何のために銭湯を訪れているのか。本稿では以上の問題についてアプローチをしてみたい。この点を考えることは、廃れつつあるものとしてではなく、アクチュアルな日常の文化として銭湯を捉え返す作業ともなり、日常的民俗学における銭湯研究を前進させることにつながると筆者は考えている。

そこで、本稿で試みるのは、サードプレイスという概念を通して、銭湯を日常のなかに組み入れている生活者たちのあり方を検討することである。日々の暮らしのなかで身をおく空間に、自分なりに特別な場所を設けようとする人の姿を照射する点で、このサードプレイスという考え方は有用である。

本稿の作業内容を確認しておく。1章では銭湯の先行研究を整理したうえで、現代的な銭湯の利用のあり方を分析するための視座として、サードプレイスを用いることの有効性を確認する。2章では現代的な銭湯利用のあり方を述べる前提として、銭湯の概要および歴史の変遷を整理する。3章では銭湯がどのように利用されているか、事例を検討する。4章では3章の事例をふまえ、そこでの経験をサードプレイスという概念で分析することで、銭湯が一日の中でどのような場所として利用されているかを明らかにする。

## I 先行研究の整理と問題の所在

### 1 先行研究の整理

冒頭でも述べたように、本稿では銭湯の現代における利用のあり方を分析する。そのためにも、まずは銭湯をめぐる民俗学および隣接分野における議論を整理する。

銭湯をめぐる研究は主に①同郷者のネットワークに関心を向けた生業研究 [宮崎 1998；谷口 2002；山口 2012；吉田 2020]、②歴史の変遷に関心を向けた研究 [中野 1970；松平 1997；印南 2003；吉田 2019；正月谷 2024；吉田 2024]、③銭湯における入浴マナーに関心を向けた研究 [佐藤 2006]、④銭湯の立地場所に関心を向けた研究 [西橋・薬袋 2020]、⑤コミュニティ・居

場所として関心を向けた研究に分けることができる。ここでは、以上のうち、本稿に密接に関わると思われる、⑤コミュニティ・居場所に関心を向けた研究について整理しておきたい<sup>1)</sup>。

こうした観点の議論として民俗学では岩本通弥が昭和初期ごろまで、風呂屋と床屋は公衆衛生上の施設としてだけでなく、地域コミュニティやいこい、くつろぎの場として機能していたと述べている。ただし、これは地縁で結ばれた社会を前提としている。また、風呂屋は異なる階層の者同士が対等の人間として接触しなければならない空間であったため、情報交換の場としても機能していたと指摘するが、こうした機能は現在の都市ではみられなくなっており、失われたコミュニティ空間であると位置づけている [岩本 1983 : 80-81]。なお、本稿で扱うようなコミュニティ・居場所に目を向けた議論は、民俗学では蓄積が少ない。

この指摘と対照的な分析を行った成果としては、造園学の山本清龍らの成果がある。山本らは練馬区の銭湯を事例として取り上げ、1998年の住宅地図をもとに、銭湯は都市形成の過程で拡張のフロンティアとなるような場所に立地することや、銭湯を利用する人びとの中で入浴という行為を通じて、様々なコミュニケーションが存在し、情報や連帯感の共有があったと考察している [山本ほか 2000 : 737-738]。

山本らの考察と近いものとしては、デザイン工学における加藤優一の成果があげられる。加藤は2017年から2018年にかけて杉並区の銭湯を事例に、銭湯と銭湯に隣接した風呂無しアパートにおけるコミュニケーションを主とした共同プロジェクトについて報告している。それによれば、銭湯は都市におけるシェアスペースであり、したがってサードプレイスに近い場所である。都市生活における余白の役割を果たしており、身を守るものがない状態で、湯に入る気持ちよさを共有することが他者に対する開放的かつ友好的な認識を促すと述べている [加藤 2018 : 100]。

ここまで、本論文での調査対象となる銭湯の先行研究の整理を、主にコミュニティ・居場所研究を中心に行った。かつての風呂屋が備えていたコミュニティ・いこいの場としての機能の喪失が指摘される一方、現代も銭湯

にコミュニケーションの空間としての側面を見出す議論もみられる。次節では、以上の先行研究を踏まえたうえで、本稿における問題の所在を明らかにしたい。

## 2 問題の所在

本節では本稿における問題の所在を明らかにする。前節で述べたように、民俗学においては、特に歴史的変遷や同郷者のネットワークに関心を向けた生業としての関心がみられる一方、利用者にとっての、銭湯の暮らしの中での位置づけにも関心を向けてきた。もっとも、後者の議論は蓄積が少なく、注目されてこなかった課題といえよう。民俗学は生活者たちの視点から暮らしの中の実践に着目してきた学問であり、この点こそ突き詰める必要がある。現代における銭湯の利用のあり方を探ろうとする本稿は、そのような民俗学の関心に基づくものである。

前節で確認したように、銭湯のコミュニティやいこいの場としての機能は現在では失われてしまったとされるが、その一方、山本らや加藤の研究が示すように [山本ほか 2000; 加藤 2018]、そうした機能が本当に「失われてしまった」のかは改めて考える余地がある。個人化が取り沙汰される現代社会の中で、これまでのコミュニティとは異質なものであっても、他者とのつながり方のありようを捉える必要があるのではないか。以上の認識は、民俗学の「居場所」への関心とも響きあう。民俗学はこれまでモーニングや [島村 2020]、まちおこしの拠点としての古い酒蔵など [松村 2016]、様々な生活空間を居場所としてとらえ、分析を行ってきた。現代では内風呂の普及率が高く、本来であれば通う必要のない銭湯もまた、居場所の一つとして経験されているのではないだろうか。

さて、銭湯は異質な他者と肩を並べ、混雑時には肌をよせあいながら入浴を行う場所である。そのような場所経験は、生活者に何をもたらすのだろうか。家でもなく職場でもない銭湯という空間を、物理的な空間としてのみならず、居場所などの意味づけられた場所として読み解いていく必要があるだろう。そこで、分析の視座としてサードプレイスという概念を用いる。サー

ドブレイスはアメリカの社会学者レイ・オルデンバーグが提唱した概念であり、家（第一の場）でも職場（第二の場）でもない、第三の場とされる [オルデンバーグ 2013]。生活者たちが家でも無く職場でも無い銭湯という空間を居場所として意味づけていくありようを分析するための視座として、当該理論は有効である。

サードブレイスは、日本においてはこれまで都市計画学や社会学で多岐に渡る分析が行われてきた。例えば、日本における初期の研究としては都心の職場周辺に形成されるサードブレイスとしての喫茶店が注目され [林田ほか 2003]、サードブレイスの類型論に発展してきた [小林・山田 2014]。類型論はその後も成果が積み重ねられている [石山 2021]。このほか、近年では、オンライン上のサードブレイスを分析するものとして、MMORPGを対象としたもの [高田 2019]、Twitterを対象としたものなどが蓄積されている [高谷 2019]。

なお、先述のように、銭湯をサードブレイスとして捉える議論がないわけではない。銭湯がサードブレイスであるか否かについて、マイク・モラスキーは以下のように述べており、示唆に富む。

銭湯もサードブレイスになり得ると思う。自宅に風呂がない人はさておくとして、風呂があるのに週に何度か銭湯に出かける人は、単に足を伸ばしたいがために行っているだけではないはずである。その場の雰囲気、そして銭湯特有の社交を求めているためでもあろう。また、銭湯も居酒屋と同様に、いつも同じ時間帯に行くと、だいたい同じ顔ぶれがそろっているから、そのうちに軽い会話を交わすことになる [モラスキー 2013: 478]

ここでのモラスキーの言葉をふまえ、仮にサードブレイスとして銭湯を捉えた場合、そこには現代の居場所のあり方が浮かび上がってくるはずである。ただし、既往の議論には以下の点で問題がある。例えば、加藤は銭湯がサードブレイスに近い場所だと指摘しているものの [加藤 2018: 100]、銭湯がど

のようにサードプレイスとして経験されているのか、実証的な分析はしていない。そのほか、高橋愛典と平井裕三は銭湯をサードプレイスとして捉えたうえで、高齢者福祉における活用の可能性を論じており、その視点は注目すべきものであるが、聞き取り調査によるデータを提示しているわけではなく、銭湯がサードプレイスとして利用されているありようを明らかにしているとはいえない [高橋・平井 2018]。日本の銭湯との共通点を指摘しつつフィンランドのサウナを取り扱ったこばやしあやなの成果も、公衆サウナや銭湯といった公衆浴場をサードプレイスだとしているものの、オーナーへの聞き取りが中心であり、利用者への聞き取りは行なわれていない [こばやし 2019]。加藤や高橋・平井・こばやしのいずれの成果も、サードプレイスが所与のものとして提示されているが、利用者の視点からの銭湯をとらえているわけではなく、人びとの等身大の生活体験としての銭湯のあり方、居場所としてのあり方や意味にまでは踏み込めていない。

先行研究が利用者に注目していないがために陥っている問題をさらに指摘しておく。先も述べたように、銭湯がサードプレイスであるということは、人びとが第一の場、第二の場との往復のなかで、またはそれらとの相関において、銭湯を居場所として選び取ったことを意味する。言うまでもなく、銭湯の利用者は銭湯だけで1日を過ごしているわけではない。家・職場・公共交通機関など、さまざまな空間を移動しながら生活をし、そのなかで銭湯がサードプレイスとして意味づけられているのである。したがって、銭湯をサードプレイスとして捉えるには、それ以外の生活空間・時間軸をも射程に入れた分析を行う必要がある。サードプレイスは、主観的な経験が創出するのであるから、サードプレイス化された空間のみに注目する議論は、意味をなしていないともいえる。この点をふまえ、本稿では調査対象者の1日の移動のあり方を踏まえた分析を試みる。藤島人時は国・都市・人のそれぞれの枠組みにとどまっていたこれまでの研究から、それぞれの枠組みを乗り越えるような銭湯の研究が望まれるとしているが [藤島 2023: 25]、銭湯という空間を越えた視点のもとで銭湯の場所としての意味を考察する本稿はそのような課題に応えようとするものでもある。

以上、本章では、先行研究を整理したうえで、問題の所在を明らかにした。次章では、事例の提示に先立ち、銭湯の概要と歴史的変遷について、整理を行う。

## Ⅱ 銭湯の概要

### 1 銭湯の制度的概要

本章では、事例の提示に先立ち、銭湯の概要と歴史的変遷を明らかにしていく。

まず、銭湯の法的な位置づけと、銭湯と同一視されがちである温泉やスーパー銭湯、健康ランドの違いについてまとめたい。温泉と銭湯は、温泉は温泉法の対象となる入浴施設、銭湯は公衆浴場法の対象となる施設である点で相違する。銭湯とスーパー銭湯、健康ランドは施設の分類としては公衆浴場に含まれる。公衆浴場は、公衆浴場法（1948年7月12日制定、法律第139号）の第1条第1項で「温湯、潮湯又は温泉その他を使用して、公衆を入浴させる施設」と定義されている。

続いて、銭湯と混同されることの多いスーパー銭湯との違いについて触れておく。銭湯は一般公衆浴場に分類され、スーパー銭湯や健康ランドは「その他の公衆浴場」に分類されている。スーパー銭湯と健康ランドとの違いには宿泊施設の有無等がある。銭湯とスーパー銭湯の違いは、例えば、銭湯とスーパー銭湯では価格帯が違い、銭湯は物価統制令により各都道府県での入浴料が定められている。例えば、東京都では2024年10月現在大人550円、中人200円、小人100円と定められている。一方でスーパー銭湯は施設ごとに価格が異なる。なお、本稿で述べる銭湯とは、公衆浴場の中でも物価統制令で入浴料金が定まっている一般公衆浴場を指すものとする。

以上、本節では銭湯の基本的な概要について整理を行った。内風呂が普及し、現代では廃業が続くといわれる銭湯ではあるが、どのような歴史的な過程をたどっていったのだろうか。

## 2 戦後における内風呂の普及と銭湯の減少

本節では、銭湯の歴史的変遷について、確認をしていく。なお、銭湯を通史的に記述することは紙幅の都合上困難であり、また、本稿は現代における利用実態を明らかにすることを目的としているため、ここでは銭湯を取り巻く状況が大きく変わった戦後の変遷の整理にとどめる。以下では、松平の成果 [松平 1997] によって、本稿で対象とする銭湯の所在する大田区を含む、東京都の銭湯の歴史的変遷の整理を、主に内風呂の普及と銭湯の数の推移から試みる。

松平によれば、終戦直後の東京にあった銭湯は、わずか700軒程度であった。やがて、世の中が少し落ち着きだした1948年後半になると燃料の確保に目処が立ち、銭湯が活気づいていったという。その後、東京の銭湯は人口の増加につれ、年平均100軒の割合で増加し、1968年には2,687軒とピークに達する [松平 1997: 31]。

銭湯から内風呂への変化は1955年に日本住宅公団が発足し、公団住宅内に狭いながらも内風呂が設置されたことから始まったと松平は述べる [松平 1997: 32-33]。そのような内風呂が急激な成長をみせるのは1960年代であり、1960年代後半には50%を超える家庭が浴室をもつようになり、1990年代にはその普及率が90%を超える。この背景には、ホーローやステンレス製の浴槽、ユニットバスの普及が考えられるが、これは生活者たちに内風呂への強い希求があったからだ、と松平は述べている [松平 1997: 34-35]。浴室保有率、つまりは内風呂の普及率は総務省の住宅統計調査で最後に調査された2008年の時点で95.5%とあり<sup>2)</sup>、銭湯の数は以上の過程で減少していったことがわかる<sup>3)</sup>。

内風呂の普及に伴い、東京都内の銭湯の数が減少していったことがわかったが、参考までに松平がピークだと指摘した1960年代以降の全国の銭湯の数がどのような推移をたどっていったのか、厚生労働省の「衛生行政報告例」をとおして提示する。これによれば、1977年時点で16,866軒、1985年13,787軒、1990年11,725軒、2000年8,117軒、2010年5,449軒、2020年3,231軒であり、大幅な減少傾向が続いている<sup>4)</sup>。なお、東京都の調査によれば、東

京都では 2022 年時点で、462 軒の銭湯が残っているが、直近 15 年の動向を見ても 2008 年 797 軒、2018 年 545 軒、2021 年 480 軒と減少傾向にある。銭湯利用者数も直近 15 年間で、2008 年で 33,815 人、2013 年 26,169 人、2018 年 23,083 人、2021 年 19,770 人、2022 年 20,020 人である<sup>5)</sup>。2021 年から 2022 年で 200 人程度増加しているものの、減少傾向にあるといつてよい。

ここまで、本章では銭湯の概要および歴史的変遷の整理を試みた。本稿で取り扱う物価統制令上の銭湯の件数が減少していること、それは内風呂の普及が大きく関わっており、現代では内風呂の普及率が 95.5%となっていることを、本章では確認してきた。浴室保有率調査も高普及率（9 割程度）が継続していることなどにより、2008 年時点で廃止されている<sup>6)</sup>。内風呂は多くの生活者にとって当たり前のものとなったといえるだろう。銭湯は、特段の理由が無い限り、衛生生活上は必要の無いものとなっていったことがわかる。それでは、内風呂の普及率が 95%を超える現代において銭湯に通う人びとは、銭湯をどのように暮らしの中に位置づけているのだろうか。次章では事例を提示することにより、以上の点を明らかにする。

### Ⅲ 銭湯に通う人びと

#### 1 調査概要

本章では、筆者の調査成果をもとに、銭湯の現代における利用のありようを描く。先述のように、これまでの銭湯研究は利用者の暮らしの中での位置づけにあまり注意を払ってこなかったが、本章では特にこの点に注目する。それに先立ち、本節では調査方法および調査対象地の概要をおさえる。

本稿では東京都大田区にある銭湯 A を調査対象地として選定した。銭湯 A は東京都大田区の住宅地の中に位置する銭湯で、飲食スペースを併設している。2023 年 10 月現在、営業時間は 10 時～24 時で、年中無休である。なお、銭湯 A のある大田区は銭湯の件数が都内最多である<sup>7)</sup>。内風呂が普及した現代においても銭湯の需要が高く、生活のなかに銭湯が組み込まれた話者と接触しやすいことが想定されたため、本稿では大田区の事例を選択した。

また、本稿では筆者が行った対面でのインタビュー調査の成果に分析を加える。調査期間は2019年11月～2023年6月であり、話者は4名であった。話者は、銭湯内で知り合った利用者からスノーボールサンプリングで拡張した<sup>8)</sup>。なお、調査後に話者たちには適宜メールや電話といったツールを用い、事実確認を行った。いずれの話者も自宅に内風呂があることも付記しておく。

以上をふまえ、次節では銭湯がサードプレイスとして様々に経験されるあり方をデータに則して確認する。また、3節ではそのような銭湯が、一日の中でどの時間帯に利用されているかを提示する。

## 2 サードプレイスとしての銭湯

本節では話者たちによる銭湯Aの経験のあり方を検討し、サードプレイスとしての銭湯の実態を明らかにする。事例は生年順に提示する。

**【事例1】** 話者a (1951年生、東京都大田区在住、2020年10月聞き取り)

10年ほど前から銭湯Aに通っている。定年退職をする以前は品川に住んでいたとのことで、そのころから銭湯には日常的に通っていた。銭湯Aに通う頻度はおおよそ一日おきであり、日曜日、火曜日、水曜日、金曜日に訪れている。このように連続して通っているためか、顔見知りのような存在ができるという。調査時にも他の利用客と会話をしている様子を観察することができた。

話者aにとっての銭湯は、なんとなく落ち着く場所や、息抜きができる場所という認識であり、「なんとなく通いつけている」という。また、銭湯に入る際には浴場内ではあまり長話をしないようにしている。話者aは主に昼の14時から15時くらいに訪れるため、あまり長風呂してしまうと、冬場の場合は帰宅時に日が暮れてしまうからであり、また、疲れてしまうからである。そのため、会話をする際は脱衣所などの浴場以外の場所で行う。その他の理由として、夜間に訪れると、会社帰りの利用客などで混んでしまい、「浴室内のスペース（特に洗い場の部分）が狭くなって歩きづらくなっちゃうからね」と洗い場の部分を指さして語る。

14時から15時の間は比較的利用客が少ない時間帯であるという。

【事例2】話者b（1960年生、東京都大田区在住、2019年11月聞き取り）

銭湯Aの常連客であり、通い始めて30年ほどになる。現在は週に2～3回ほどのペースで通っている。

話者bは大学卒業後上京してきたが、その後、銭湯があるからとの理由でこの地域に転居してきた。銭湯Aの近辺には入浴施設が複数存在し、話者bは銭湯A以外の銭湯も定期的に利用している。「食事で同じメニューを食べていたら飽きるのと一緒に、たまには別の銭湯に行きたくなる」と語る。

話者bの家には内風呂があるが、「銭湯仲間」と話すために来ているとのことであった。この銭湯仲間は、銭湯でよく会う顔見知りだが、お互いに名前や素性などの個人情報に関しては詳しく知らず、一緒に会話しながら入浴し、その後お互いに時間が合えば2階にある宴会場で一緒に2～3時間ほど飲食を行うといった間柄である。

【事例3】話者c（1972年生、神奈川県川崎市川崎区在住、2020年10月、2023年6月聞き取り）

銭湯に通い始めて20年以上になる。以前は銭湯Aの近辺で勤務し、居住していたため、毎日のように銭湯Aに通っていたが、現在は銭湯Aからは離れた南武線沿線に勤務し、川崎駅近辺に居住している。話者cによれば、内風呂と銭湯は全くの別物である。理由としては、銭湯は大型の浴槽で思いっきり足を伸ばすことができ、リラックスできるためである。

また、銭湯は話者cにとっては息抜きができる場所である。そして、毎日銭湯に通っていたころは知り合いや友人ができたが、最近は通うペースが週2～3回になり、そのように頻度が減ってからは、友人はできていない。

現在、通勤経路から外れていることから、疲れてしまい、銭湯Aに通

う頻度は年に1~2回ほどとなっている。しかし、銭湯が好きであるため、他の店には現在でも通っているようである。時間がないときは通勤経路の途中にある鹿島田駅の近くにある銭湯を、時間的余裕がある際は川崎駅から徒歩25分ほどの銭湯に行く。

【事例4】話者d（1997年生、東京都大田区在住、2020年11月聞き取り）

初めて銭湯に訪れたのは小学校2年生くらいのころだった。幼少時は親に連れられて訪れていたが、金銭面や時間面で自由度の高くなる大学生になってから、自発的に通い始めた。コロナ禍になり、娯楽が全体的に減ったことや、社会人になったことにより通う頻度は高くなった。頻度としては月に1度程度で通っているが、自宅付近に銭湯A以外の銭湯があり、主にそちらのほうに通っているため、銭湯Aはしばらく来ていない。移動手段としては、自宅付近に銭湯Aがあるため、徒歩や自転車が主である。

話者dにとっての銭湯は、息抜きのものである。ただし、幼少時は、知らない人と一緒に入浴する場ということもあり、銭湯を怖い所だと思っていた。銭湯内で知り合いはできたことがなく、基本的に人と会話は行わない。

以上で提示した話者は、いずれも内風呂を所有していながら、週に4日から月に1回程度という幅はあるものの、定期的に銭湯を利用している。また、銭湯の使用歴は数年に及ぶものが多く、銭湯に通うことが習慣として生活に定着している人びとである。銭湯に通う動機として頻出したのは「息抜き」「リラックス」という精神的な満足を意味する言葉やそれに類するものであった。そのため、いずれの話者においても、銭湯の第一義的な機能である身体の清浄化以外の意味を求めて利用をしているといえる。

なお、拙稿ではサードプレイスそのものの性格を検討したことがある。その際の要件として、参加のハードルの低さ、その場において自由にふるまえること、社会的属性からの解放、これらにより満足を得られることなどに求

めたが〔真保 2022: 108〕、これにより、上で示した銭湯の利用のあり方をおおよそ説明することができる。例えば、話者 a のようになんとなく通い続けることができるのは、参加のハードルが低いからこそである。また、銭湯の楽しみ方はそれぞれであり、誰かと会話をする話者もいれば、そのような付き合いを求めない話者もある。そして、話者 b が顕著であるが、そこでの交流は互いに素性や名前を知らない状態で行われる。社会的属性が無効化するか、薄れる場として経験されていると考えられる。そして、先述のように、銭湯を利用する動機としては、息抜きやリラックスといった言葉があげられる。サードプレイスは「居心地の良い場所」とされるが、話者らにとっての銭湯 A はその要件を満たしているようである。

さて、本節では、日常的入浴行為とは異なる入浴行為のために銭湯を定期的に利用する人びとの姿を報告したが、その経験のあり方が多様であることもみえてきた。この点は 4 章 1 節で改めて分析する。次節では、銭湯 A が話者たちの一日の流れの中でどのように経験されているのかを提示してみたい。

### 3 一日の流れの中の銭湯

本節では銭湯の利用のあり方を、一日の流れの中で考えてみたい。特に、前節で語りを提示した話者のうち、一日の過ごし方についての調査が叶った話者 a、話者 c、話者 d の 3 名のデータを分析する。前節でも示したように、銭湯はリラックスや息抜きの場として語られている。したがって、一日の流れを考えるうえでは、意識の緊張感の度合いに注目する必要がある。なお、ここで示す一日の流れはあくまでも話者自身の想起したモデルであり、具体的なある一日の流れを再構成したものではないことも断っておきたい。

#### 【事例 5】話者 a の一日の過ごし方

朝は 6 時半から 7 時くらいに起きる。起床後は朝食をすぐにとり、午前中は日課であるラジオを聞いて過ごす。昼食を 12 時頃に取った後は、ラジオを聞いて過ごすが、14 時から 15 時の間で銭湯を訪れる。帰宅後もラジオを聞いて過ごす。夕食は 18 時頃にとるようで、食事のだいたい

の時間が決まっているからか、腹時計で自然と食べるようになった。その後は夜 22 時に就寝する。

仕事をしていた時は緊張感があったが、退職し、年金で暮らすようになってからは緊張感などの意識はない。外出も、年金で暮らしていることもあり、あまり行わない。銭湯は日常的に訪れているからか、生活の延長上にあるようなものである。

#### 【事例 6】 話者 c の一日の過ごし方

朝は 6 時 50 分に起床し、7 時 20 分に家を出る。8 時過ぎには職場に到着し、夜の 19 時 40 分ごろ、仕事を終え、21 時ごろ銭湯に到着し、40～50 分ほど滞在したあと、22 時すぎに帰宅し、酒などを嗜み、寛いだのち、24 時に就寝している。

話者 c によれば、緊張感をオン・オフのようなもので示せば、「朝は体がオフの時間であり、職場のドアをくぐるとオンになる。オンになれないときも、職場での仕事着を着用すると強制的にオンになる」という。しかし、「帰りは仕事の悩みなどで職場を出たからといってすぐにオフになれるわけではなく、なかなかオフになれないことがある。自宅に仕事の気分や嫌なことなどを持ち込みたくないため、銭湯に入る」と語る。

#### 【事例 7】 話者 d の一日の過ごし方

朝は 8 時半に起床し、9 時ごろに朝食を食べる。9 時半ごろに家を出て、10 時 15 分くらいに職場に到着する。職場の始業時間が 10 時 30 分で、昼休憩を 13 時～14 時にとるといふ。19 時 15 分に仕事を終え、20 時ごろに銭湯に到着し、1 時間ほど銭湯に滞在する。21 時ごろに銭湯をでたあとは帰宅し、21 時 10 分ごろに帰宅、22 時くらいに夕飯をとるといふ。帰宅後の自由時間は読書やゲームなどをして、過ごしている。

話者 d は「ミーティングなどの緊張する場や特に意識して人と接する場では特に緊張することはあるが、家にいるときは完全にリラックスし、職場ではゆるくも緊張感を持ち続けることとなり、銭湯に行っても人前

ににいるという理由で完全にぬけるわけではない」と述べる。この緊張感については、常に全力は出していないけれども、一定の力は出している状態である。例えば職場では緊張感が強いが、波があり、スイッチが入ったように変わる自覚はなく、同じ作業をしていても気分によって度合いが変わる。同時に銭湯は緊張感がありつつも楽しめる。心のギアをかけつつも安らげる場所である。また、職場の嫌なことを忘れるために行く。

以上、話者たちの一日の過ごし方の流れを述べてきたが、銭湯が利用者たちの日々の暮らしにおいてどのような位置にあるのか、おおよその共通点はあるものの、事例5と事例6・7では過ごし方が異なっていることに注目したい。また、ここからはサードプレイスを暮らしのなかに設けることの意味もうかがえる。この点については、4章2節で考察を行う。

## IV サードプレイスとしての銭湯から見えてくるもの

### 1 生活者から見たサードプレイス

本章では、銭湯がサードプレイスとしてどのように経験されているかを、前章で示した事例をもとに考察していく。

まずは、利用の形態である。事例1～4では、会話の有無など、利用の仕方がそれぞれ異なっている点に注意したい。サードプレイス研究ではこれまで、そこでの過ごし方に注目して、社会的な交流を目的とした社会的交流型と、自分ひとりで過ごすことを目的としたマイプレイス型という類型を様々な空間にあてはめてきた [片岡・石山 2017]。3章2節の事例では、話者a、話者bが他の利用客と会話をしながら入浴をしている。話者cは当初は他の利用客と会話をしていたものの、そのような関係はなくなってしまった。話者dは基本的には他の利用者との交流は行わないとしている。先述の片岡らによる類型にあてはめれば、話者a、bは社会的交流型であり、話者cは社会的交流型からマイプレイス型への変化が生じており、話者dはマイプレイス型と

して過ごしていることになる。銭湯という空間は、社会的な交流を目的とした社会的交流型と、自分ひとりで過ごすことを目的としたマイプレイス型のそれぞれの利用が共存している環境である。これは、空間の性格としてサードプレイスの類型を当てはめる石山恒貴の見方を覆すものである [石山 2021]。石山は以下のように述べる。

約 90%の顧客が、ひとりで黙って過ごす場であるスターバックスは、典型的なマイプレイス型とみなすことができるだろう。(中略) 神楽坂の喫茶店を調査した研究では、カウンター席での常連の交流が観察されたが、これは伝統的サードプレイスとみなすことができよう。(中略) 近年はコワーキングスペースが注目されている。(中略) コワーキングスペースも、伝統的サードプレイスとテーマ型サードプレイスの特徴をあわせ持つと考えられる。[石山 2021 : 9-10]

空間に特有の経験のかたちがあるという主張は理解できなくはない。しかし、今回筆者が提示した事例においては、銭湯という一つの空間においても、社会的交流型およびマイプレイス型が混在している。あるいは、ひとりの話者においても、社会的交流型からマイプレイス型への移行が行われている。話者 c の事例 3 においては、このような移行には、銭湯に通う頻度が関わっていた。他者と共有する空間を繰り返し、高頻度で利用するからこそ、顔見知りができ、コミュニケーションが発生し、友人ができる。ひるがえって言えば、社会的交流型のサードプレイスも、最初から交流の輪が用意されているわけではない。「マイプレイス」として気に入り、通うからこそ、そこが社交の場に変わり得るともいえる。サードプレイスの類型論はこうした経験の過程的な性格を考慮すべき余地があるといえるだろう<sup>9)</sup>。

ここまでみてきた銭湯のサードプレイスとしてのあり方は、岩本が喪失を指摘したコミュニティやいこいの場としての機能の今日的なかたちを照射しているともいえる [岩本 1983]。また、山本らの分析では、「入浴という行為の中では様々なコミュニケーションが存在し、情報や連帯感の共有があった」

と推察しているが [山本ほか 2000: 738]、銭湯利用者同士が相互につながりをもつ局面はたしかに存在し、それが銭湯に通うモチベーションともなっている。むしろ、こうしたつながりのあり方をより実証的に分析する余地を指摘することができる。

さて、本節ではサードプレイスがどのように経験されているかを、先行研究におけるコミュニケーションの有無を指標とする類型化および時間軸を用いた類型の変化に注目して考察を行ってきた。サードプレイスとしての銭湯のあり方は、これまでの研究における類型の操作では捉えきれないものである。これは、空間やその提供者ではなく、利用者に注目しつつ捉え直したことにより、見えてきた事実である。またここからは、コミュニティ・いこいの場としての機能が失われた空間としてのみ銭湯を捉えるのではなく、そこでのつながりのあり方に注目すべきこともみえてきた。

それでは、このようなサードプレイスとして経験される銭湯は生活者たちにとって一日のうちどのような場所として機能しているだろうか。次節では3章2節で示した事例をもとに、考察を加えていく。

## 2 サードプレイスとしての銭湯はどのような場所か

人は社会に接続する上で緊張度や昂奮の状態の振れ幅がある。例えば、通勤する社員が自宅に帰ると、自宅では会社の中での自己、社員という社会的属性からは解放されるが、同時に一家の一員という属性を得る。また、家族と離れ、一人の時間になることで緊張感がとける人も存在するだろう。この、「社会的属性からの解放」が3章2節で示した話者cの事例で示したオンからオフへの切り替えのきっかけと考えることもできる。銭湯は、オンからオフになる間の、いわば中間的な状態に身をおくために利用されることが、話者cと話者dのデータからは読み取ることができる。特に、話者cは仕事での嫌なことを家に持ち込まない、家ではオフで居たいという理由で銭湯を利用している。言い換えれば、「仕事を家庭に持ち込みたくない」という精神的な職住分離の意識が、リフレッシュの場としての「家でも職場でもない場所」、すなわちサードプレイスを希求している。だからこそ、そこは職場や家

庭生活で付与される属性から解放される場所である必要があるといえよう。これは、仮に職場の人間が銭湯に同行した場合、実現できない経験であるといえる。職場での属性が持続するからである。だとすれば、ある空間がサードプレイスとして機能するか否かは、空間の性質である以上に、利用者側の状態や属性、その訪れ方に依存しており、前節と同様、先行研究の類型論を批判すべき根拠となる。

以上のように考えられるからこそ、定年退職前の人物と定年を迎えた人物とではサードプレイスの一日の中で位置づけは相違することになる。話者 a のデータは、定年退職したことで家と職場の往復を行わなくなった高齢者の事例であった。銭湯に「日課的になんとなく来てしまう」と話者 a は述べていたが、これをどのように考えられるであろうか。前章で示したデータと合わせて考えると、家と職場の移動がなくなったことにより、何らかのかたちで社会に繋がろうとするあり方がそこにはうかがえる。3章1節で確認したように、サードプレイスとしての銭湯では、他の利用者とは会話しても良いし、そうせねばならないわけでもない。そして銭湯でのつきあいはその場かぎりのもので、深い交際に必ずしも展開しないし、拘束的でもない。このようなあり方は、銭湯が社会的属性から解放される場であると同時に、社会にゆるやかに接続する場としての機能をも持ち合わせていることを意味する。そうしたゆるやかさは、コミュニティと呼び得るほどの結びつきを必ずしも生み出さない。いわば、サードプレイスは「コミュニティの萌芽」とでも呼べる状態に人びとを引き入れるのではないだろうか。

しかし、銭湯でのつながりが、あくまでもその場限りの顔なじみといった程度の匿名性の高さに支えられている点は、岩本の指摘した地縁に結びついた風呂屋のあり方とは異質である。岩本の議論する銭湯は前提として町内活動が盛んであり、運命共同体として協力し合う時代が前提にあった。岩本も指摘するように、今日の都市においてはそのような地縁は重視されなくなっている [岩本 1983: 80-81]。2章2節で確認したように、内風呂の普及により銭湯は生活に必須の空間ではなくなったことから、地域における密接な結び付きは銭湯では生まれにくくなったといえる。ただし、地域の密接な結

び付き自体が希薄化している現代だからこそ、ゆるやかに社会との接続を試みることができる居場所として銭湯が利用されていることも見えてくるといえよう。

また、先述した匿名性とあわせて、銭湯は自らとは異なる他者とつながりあう場でもあることも指摘しておく。例えば、以下に話者cの語りを提示してみよう。

### 【事例8】

現在と違い、人との距離がグッと近い時代でしたので、(中略)片目を失った元プロボクサー、アル中の夫婦、銭湯が好きなイギリス人の大学教授、変わり者のヨガインストラクター、偏屈な中華料理人、今で言うニューハーフの日本舞踊の先生など自分の住んでいる世界とは異なる個性豊かな人びととの交流が当時の私にとって、とても刺激的であり、20代の私の悩みなどもよく聞いてもらっていました。

現在より少し前のことと話者cは語るが、自らの帰属するコミュニティでは出会うことのないような他者と、時にゆるやかな接点を持ち得ることが銭湯の面白みとして位置づけられている。これまでの筆者の調査でも、銭湯Aやそれ以外の銭湯で他者から進んで話しかけられ、雑談に花を咲かせた経験が数多くある。ただし、一方でその多くに連絡先を聞いているわけではなく、その場限りのつながりである。したがって、銭湯という場所は他者と「つながる」場であると同時に、関係が「ほどけていく」ような場所である。

以上を整理する。これまでの考察からサードプレイスとして利用されている銭湯は、①職場と家庭、またはオンとオフの間にある、緩衝材的な場所として、そして、そのような性格のゆえに②社会にゆるやかに接続することができる場所として、機能しているといえるであろう。

本節ではサードプレイスとしての銭湯が、一日の暮らしの中で経験されるあり方に注目したが、ここで見えてきた性質こそ、内風呂が普及した現代であっても、人びとが銭湯に通う理由であると考えたい。

## おわりに

本稿での議論を整理する。本稿では、現代において減少傾向にある銭湯に、内風呂があるにもかかわらず通う人びとがいる現状について、サードプレイスという概念を使用しながら分析を行った。

第1章では議論の前提として民俗学および近隣分野における銭湯の研究を整理したうえで、既存の銭湯の研究には人びとの暮らしと関わる銭湯のあり方が等閑視されていることを確認した。第2章では本稿で扱う銭湯の概要をまとめた。また、銭湯がどのようにして多くの生活者たちにとって日常的な暮らしの外側に押しやられていったかを、銭湯の暮らしの中での立ち位置が大きく変わる戦後以後を中心に銭湯の件数および内風呂の件数を中心に整理した。第3章では、銭湯の利用実態について、事例を提示した。第4章では、話者たちの利用実態をサードプレイスという概念を用いて分析した。これにより、銭湯という空間は、サードプレイスとしては多様に利用されており、既存の空間類型論的なサードプレイス研究の議論には多分に再考すべき余地があること、民俗学の銭湯研究においてはコミュニティやいこいの場としての機能の喪失が議論されていたが、それとは異なるかたちでの「つながり」の場、コミュニティの萌芽が生まれる場として理解すべきことを明らかにした。そのうえで、サードプレイスは職場や家庭とは異なる、文字通りの「第三の場」として、就労世代においてはリフレッシュのための緩衝地帯として、退職後の世代にとってはゆるやかに社会に接続する場として、利用されていることを明らかにした<sup>10)</sup>。確かに、現代において銭湯は多くの人の衛生生活においては必要がないものとなった。だが、いやしの場やゆるやかに社会に接続する場所として、今日も経験されているのである。

なお、3章2節の事例3では、通勤ルートの変化によりサードプレイスが変化していた。サードプレイスを考えるうえでは、人びとの「移動」のあり方に注目する必要がある。この点をふくめ、様々な要素がその空間のサードプレイス化／脱サードプレイス化にどのように関係してくるか、関係論的考

察も考慮しなければならない。この点については、別稿で改めて検討したい。

## 注

- 1) 近年の銭湯研究においては、本稿で言及できなかった成果も含め歴史学の吉田律人による蓄積が厚い。なお、藤島人時は銭湯をめぐる各分野の議論について国家・都市・人の観点で丹念に整理しており、大いに参考になる。本稿で言及することができなかった先行研究については藤島による成果を参照されたい [藤島 2023]。
- 2) 総務省統計局統計調査部国勢統計課 2011 年 3 月 9 日「住宅・土地統計調査／平成 20 年住宅・土地統計調査／日本の住宅・土地」[https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00200522&tstat=000001028768&cycle=0&tclass1=000001040559&stat\\_infid=000008640365&tclass2val=0&metadata=1&data=1](https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00200522&tstat=000001028768&cycle=0&tclass1=000001040559&stat_infid=000008640365&tclass2val=0&metadata=1&data=1) (2023 年 10 月 24 日最終閲覧) 総務省統計局「平成 20 年住宅・土地調査の解説 2-5 住宅の設備」[https://www.stat.go.jp/data/jyutaku/2008/nihon/2\\_5.html](https://www.stat.go.jp/data/jyutaku/2008/nihon/2_5.html) (2023 年 10 月 24 日最終閲覧)
- 3) 加藤によれば、内風呂の普及のほかにも建物の老朽化や後継者不足も銭湯の減少の要因である [加藤 2018 : 97]。
- 4) 厚生労働省 2023 年 1 月 19 日「衛生行政報告例／令和 3 年度衛生行政報告例 統計表 年度報」[https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00450027&tstat=000001031469&cycle=8&tclass1=000001200300&tclass2=000001200301&tclass3=000001200302&stat\\_infid=000040002913&tclass4val=0](https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00450027&tstat=000001031469&cycle=8&tclass1=000001200300&tclass2=000001200301&tclass3=000001200302&stat_infid=000040002913&tclass4val=0) (2023 年 10 月 24 日最終閲覧)
- 5) 東京くらし WEB 消費生活に関わる東京都の情報サイト 2023 年 6 月 20 日「東京の公衆浴場はどうなっているの？ (東京の公衆浴場の現状)」<https://www.shouhiseikatu.metro.tokyo.lg.jp/chousa/yokujyo/genjo.html> (2023 年 10 月 24 日最終閲覧)
- 6) 総務省統計局 2022 年 4 月 26 日「18A-Q12 水洗化率及び浴室保有率」<https://www.stat.go.jp/library/faq/faq18/faq18a12.html>
- 7) 大田区 2022 年 4 月 1 日「大田区の銭湯について」[https://www.city.ota.tokyo.jp/sangyo/sento/about\\_sento.html](https://www.city.ota.tokyo.jp/sangyo/sento/about_sento.html) (2023 年 10 月 24 日最終閲覧)
- 8) 本稿の話者は全員が男性客である。これは銭湯という空間の性質上、男女が分けられてしまい、女性客に話を聞くことが難しかったためである。この点は今後の課題とする。
- 9) 小林と山田が量的調査によって報告しているように、一つの空間の中でのマイブレイス型と社会的交流型の共存の確認は行われている [小林・山田 2014]。しかし、小林と山田の主な関心は様々な類型のサードブレイスが共存する空間を創出することにある [小林・山田 2014 : 11]。サードブレイスは仕掛けられていくものであるよりかは、生活者たちによる主観的な経験が創出するものであり、経験の過程的な性格を明らかにしていくためには質的調査を行う必要があるだろう。

- 10) 本稿では銭湯をサードプレイスとして考察したため、このような結論が出たが、カフェなどの他のサードプレイスを対象にした場合、一日の中でのサードプレイスとしての位置づけが異なってくることも考えられる。

## 参考文献

石山恒貴

2021「サードプレイス概念の拡張の検討ーサービス供給主体としてのサードプレイスの可能性と課題による検討」『日本労働研究雑誌』63(7)

岩本通弥

1983「風呂屋と床屋ー失われたコミュニティ空間ー」『歴史公論』9(7)

印南敏秀

2003「入浴と洗濯の100年」日本生活学会（編）『衣と風俗の100年』ドメス出版

オルデンバーグ、レイ

2013『サードプレイス コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』（忠平美幸訳）みすず書房

片岡亜紀子・石山恒貴

2017「地域コミュニティにおけるサードプレイスの役割と効果」『地域イノベーション』9

加藤優一

2018「まちに集（つど）えば 銭湯ぐらしー銭湯を活用したまちづくりとコミュニティの実践」『新都市』72(5)

こばやしあやな

2019『公衆サウナの国フィンランドー街と人をあたためる、古くて新しいサードプレイス』学芸出版社

小林重人・山田広明

2014「マイプレイス志向と交流志向が共存するサードプレイス形成モデルの研究ー石川県能美市の非常設型「ひよっこりカフェ」を事例として」『地域活性研究』5

佐藤せり佳

2006「銭湯の行動学」菅原和孝（編）『フィールドワークへの挑戦：「実践」人類学入門』世界思想社

島村恭則

2020『民俗学を生きるーヴァナキュラー研究への道ー』見洋書房

正月谷眞子

2024「〈春の湯〉一年中行事にみる菖蒲湯と柚子湯ー」『常民文化』47

真保元

2022「民俗学におけるサードプレイス論の可能性」『常民文化』45

高橋愛典・平井裕三

2018「銭湯の活用をめぐる地域デザイン上の論点」地域デザイン学会（編）『地域デザイン No.12  
特集地域アクターによる地域のプロデュース』地域デザイン学会

高谷邦彦

2019「サード・プレイスとしての Twitter—子育て主婦ユーザの場合—」『名古屋短期大学研究  
紀要』57

谷口貢

2002「都市における同郷者集団の形成と故郷観—新潟県西蒲原地方の出郷者と東京の風呂屋・銭  
湯の展開—」松崎憲三（編）『同郷者集団の民俗学的研究』岩田書院

中野栄三

1970『銭湯の歴史』雄山閣

西橋乃理子・葉袋奈美子

2020「立地場所と営業形態からみた東京都23区における銭湯の特性」『日本女子大学紀要 家政  
学部』67

藤島人時

2023「公衆浴場研究の動向と課題」『常盤台人間文化論叢』9(1)

松平誠

1997『入浴の解体新書 浮世風呂文化のストラクチャー』小学館

松村薫子

2016「人の心を豊かにする地域おこし—広島県三次市「卑弥呼蔵」の活動事例から—」『現代民  
俗学研究』8

宮崎良美

1998「石川県南加賀地方出身者の業種特化と同郷団体の変容：大阪府の公衆浴場業者を事例として」  
『人文地理』50(4)

モラスキー、マイク

2013「解説」オルデンバーグ、レイ『サードプレイス コミュニティの核になる「とびきり居心  
地よい場所」』（忠平美幸訳）みすず書房

山口拓

2012「東京の銭湯と同郷の結びつき—新潟県出身者を事例に—」『民俗学論叢』27

山本清龍・下村彰男・小野良平・熊谷洋一

2000「東京都練馬区を事例とする銭湯の立地特性と空間構成に関する研究」『ランドスケープ研  
究』63(5)

吉田律人

2019 「京浜工業地帯における浴場業の展開—昭和戦前期の横浜市鶴見区を事例として—」『國學院雑誌』120(10)

吉田律人

2020 「新潟県と京浜地域の浴場業者 県人会名簿及び浴場組合名簿の分析を中心に」『國學院大學紀要』58

吉田律人

2024 「公衆浴場の明治維新一湯屋文化の変化を中心に—」『日本歴史』912

